

中学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

社 会

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員(社会科部会)

分科会	氏名	学校名
歴史的 分野	宮川 享一	大田区立東蒲中学校
	木暮 恵一郎	杉並区立和泉中学校
	澤田 昌喜	豊島区立道和中学校
	柳井 裕明	板橋区立桜川中学校
	小出 宏	練馬区立光が丘第二中学校
	◎中島 勝治	足立区立江北中学校
	○富澤 鎮男	葛飾区立双葉中学校
	野口 潔人	調布市立神代中学校
	西澤 隆	東大和市立第二中学校
	上地 正人	利島村立利島中学校
公民的 分野	武藤 雄丈	世田谷区立緑丘中学校
	島田 一郎	渋谷区立広尾中学校
	○福島 保直	中野区立北中野中学校
	佐藤 久男	八王子市立石川中学校
	金子 佳子	町田市立成瀬台中学校
	山中 栄治	小金井市立小金井第一中学校
	岩浪 正広	秋川市立秋多中学校

◎ 全世界話人 ○ 世話人

担当 指導部中学校教育指導課指導主事 松本 秋広

目 次

I	主題設定の理由	2
II	歴史的分野の研究	
1	主題設定の理由	3
2	研究のねらいと方法	4
3	研究の内容	4
4	研究のまとめと今後の課題	13
III	公民的分野の研究	14
1	主題設定の理由	14
2	研究のねらいと方法	15
3	指導計画	15
4	展開例	17
5	授業の考察	21
6	研究のまとめと今後の課題	24

「多様な学習活動を取り入れ、主体的に学び続ける意欲・態度を育てる指導方法の工夫」

I 主題設定の理由

現在の社会は、科学技術の進歩と産業の進展によって、国際化、情報化、産業構造の変化が著しく進み、生活様式や価値観が多様化している。当然ながら、生徒の生活環境やそれともなう生活意識にも変化が生じてきているものと考えられる。変化する社会に生涯を通じて学び続け、たくましく生き抜いていくための基礎となる力を身につけさせていくことが学校教育の今日的な課題でもある。

情報化社会の中で中学生は、次々と新しい知識を身につけてもいるが、溢れ出る情報量の中で、単に、情報の「受け手」に終始してしまいがちな側面もある。社会科の授業はこのような中学生の特徴とその置かれている状況を踏まえ、展開させることが必要である。

しかし、従来から行われてきた授業の多くは、知識・理解が中心となり、いわゆる教師主導の画一的なものになりがちであった。また、興味・関心を高めるための実物資料や視聴覚機器の導入などの工夫も行われているが、生徒の主体的な活動、課題意識を高めるといった意味では、まだまだ、不十分な点も見られる。このような授業の展開では「社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成」に対する十分な取り組みとしては、不十分であろう。

さらに、学習指導要領においては、国民一人一人が生涯を通じ、自ら学び続けていくことが重要とされている。このためには、一人一人が自己の個性を生かし、積極的に自己実現を図っていけるよう、基礎・基本の徹底を土台として、課題意識をもたせ、自らの手で課題解決を目指すような学習が必要であると考え。また、適切な資料を用いた学習や討議法の工夫などによって社会的な見方・考え方を育てるとともに、評価方法を工夫することによって、主体的に学び続ける意欲・態度・能力が培われると考える。

以上のような観点から、上記の研究主題を設定した。

そして、本研究においては、以下の手順に基づき、主体的に学び続ける意欲・態度が育つような学習活動の工夫を行った。

- ①身近な社会的事象を取り上げ、適切な資料を活用する。
- ②適切な課題を設けて学習する手法を取り入れる。
- ③個々の生徒の特性を生かす討議法や体験的学習を工夫する。

研究を進めるにあたっては、歴史的分野と公民的分野の2つの分科会に分かれ、共通主題に基づいた分野別研究主題をそれぞれ設定し、主題に迫ることにした。

Ⅱ 歴史的分野

主体的な学習を通し歴史的事象を多角的に考察、判断し、自らの生き方に生かす力を育てる指導方法の工夫

1 主題設定の理由

現代の中学校教育では、豊かな人間性に裏付けされた日本人の育成と、目まぐるしく変化する社会に対応する生涯学習を前提とした自己教育力の育成が求められている。また、「新しい学力観」の示された背景にも、同様の考え方があり、社会科においては、「社会的な事象に対する関心、意欲、態度」「社会的な思考、判断」などの観点による評価が重要視されていると考える。

本分科会では、この自己教育力を「主体的に学ぶ意欲、態度、能力」としてとらえ、「自己の可能性を切り開き自己実現を図る力」として解釈した。そして、授業に多様な学習活動を取り入れることにより、「主体的に学ぶ意欲、態度、能力」の育成を図ろうと考えた。

主体的に学ぶ意欲、態度を喚起するためには、自ら取材し、発見する学習により、好奇心の高まり、また驚きや感動などを得る学習体験が必要である。また、自ら集めた資料などを分析し考察する学習を通し、思考力、判断力を育む学習が必要である。

以上のような考え方から、本研究主題を設定し、多様な学習活動として、視聴覚機器の活用、取材などによる資料収集、まとめかたや発表方法の工夫、班によるグループ学習等を取り入れ、「主体的に学ぶ意欲、態度、能力」に迫るための指導方法の工夫を図った。

教材として、近現代史の充実という歴史的分野の課題をも踏まえ、「第二次世界大戦と日本」を取り上げて主題に迫ることとした。今日の国際化時代において、自国の歴史を学ぶことの大切さは言うまでもないことである。そして、中でもアジア近隣諸国との友好、平和の実現に尽くす態度の育成を重視した指導計画を立てる必要があると考える。

第二次世界大戦が終結してから、半世紀が経過しようとしている。この時代については多くの体験者が家族や身近な人々の中にいる。直接の取材活動や、肌で感じることのできる教材である。またこの時代については、マスコミに登場する機会も多く、地域の資料館などの展示も充実しており、資料の入手についての利点も多い。

このようなことから、本研究では、多様な学習活動として、

- ・視聴覚教材の活用、取材などによる資料収集
- ・まとめや発表の工夫
- ・班によるグループ学習の導入
- ・自己のよさの発見につながる自己評価の工夫

などで、主体的な学習を促す指導の工夫を行い、多角的に考察、判断させ、自らの生きる力を高めることを目指して研究を推進することとした。

2 研究のねらいと方法

(1) 研究のねらい

歴史的分野における学習では、特に教師主導型の一斉授業による説明的な指導が行われる傾向が多く見られ、知識・理解中心の授業になりやすい。また、その結果、授業において生徒が、主体的活動ができる学習場面が少ないといえる。

こうした状況を改善するために、指導内容の精選と指導方法を工夫し、生徒が社会の変化に主体的に対応し、自らの生き方に生かす力の育成ができる学習活動の工夫として、次の方法を試みた。

ア、主体的な学習活動として、取材、資料収集、発表、話し合いなど自ら活動する授業を展開し、歴史について多角的な考察や判断を体験させる。

イ、これからの日本や世界の在り方について、自分の生き方と重ね合わせながら考えることにより、歴史に対するより深い理解と学び続ける意欲を喚起する。

ウ、主体的な学習を促すために、自己評価、相互評価等を取り入れ、1単位時間及び単元の指導計画に基づき、評価方法の工夫をする。

(2) 研究方法

ア、戦時下の国民生活に焦点をあて、学習内容を再構成し、指導計画や評価計画を作成する。

イ、生徒の身近な生活との関連を考慮に入れ、作業的、体験的な学習を取り入れる。

ウ、資料の収集を積極的に行い、効果的に活用する。

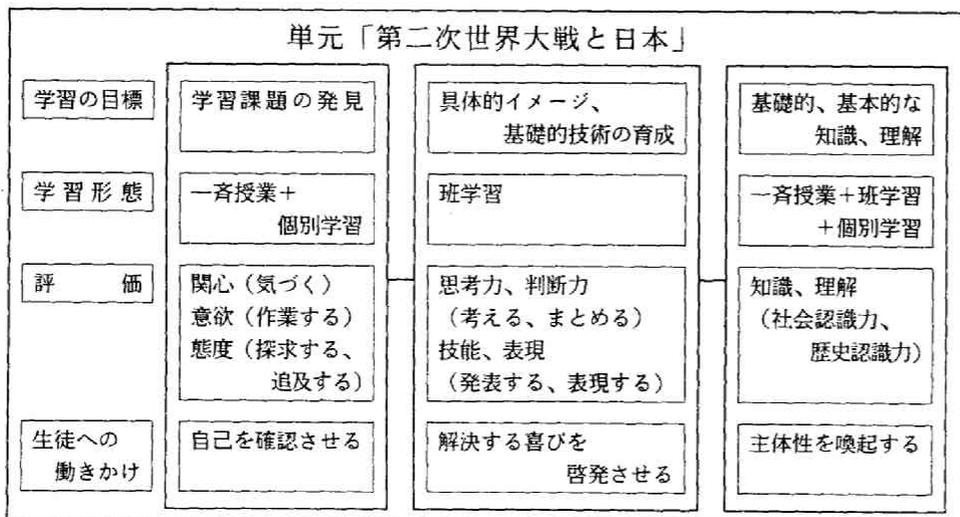
エ、指導と評価の一体化を図る指導案を工夫する。

オ、研究授業によって研究内容を検証する。

3 研究の内容

(1) 学習活動の形態と評価

本研究では、1単元の流れを3段階に分け、各段階を積み上げることを通しさまざまな能力（関心、意欲、態度、思考力、判断力、技能、表現、知識、理解等）を育成できるように工夫してみた。下記の図で示すように1単位時間の授業の中で、すべての能力の育成を目標とするのではなく、各段階（各単位時間）ごとに適した能力を育成し、1単元の学習をトータルでとらえ、その中でそれぞれの能力を育成するように構成した。



※ 左図は左から右へと段階を踏むものではなく、1単位時間、1単元の学習の中で生徒に身につけさせたい、社会科の学力である。

ア、個別学習

戦争体験者からの聞き取りや、図書館等を利用した取材活動をさせることによって、発見する学習、驚きや感動を得る学習を体験させる。

イ、班学習

それぞれが取材した課題内容を、班内又は班相互で発表し合い、分析し考察させることによって、思考力、判断力を育む。又、その内容をまとめて発表させることによって、表現力を培う。

ウ、一斉授業

教育機器や資料を効果的に活用し、学習課題の発見や、アヤイで学習した内容を確認させ、基礎的、基本的な知識、理解を身につけさせる。

(2) 単元の構成

ア、教材化に当たって

歴史的分野において近現代史の学習の充実を図ることは、今日的課題であり、国際化時代に対応できる力を育てる上でも重要である。

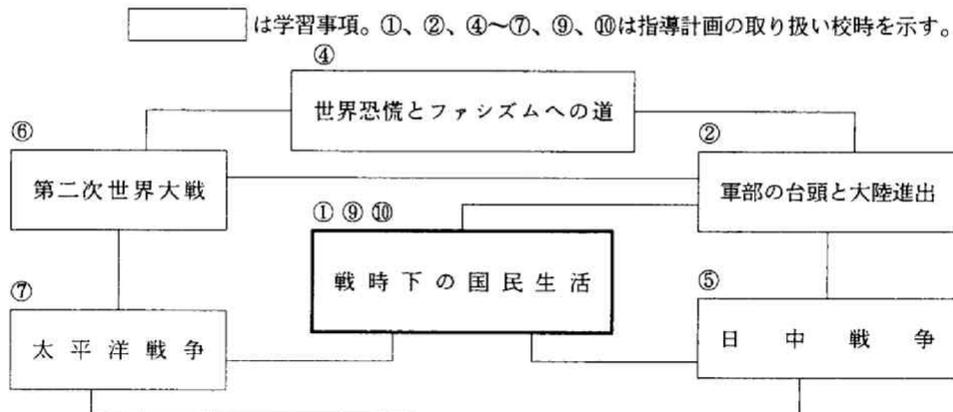
本単元のねらいは、世界の動きと我が国の国内の動きが密接に関連しあっていることに留意しながら、昭和の前半期の国際政治・経済の動向、国内の経済混乱と社会問題、第二次世界大戦と我が国のかかわりなどを多角的に理解させることである。

そして「第二次世界大戦」については、我が国をめぐる動きや「アジア諸国との関係」、さらに戦争中の国民の生活や行動の有様に着目させ、大戦が人類全体に多くの惨禍を及ぼしたことを踏まえ、世界平和の実現に努めることが大切であることを理解させる。

ユネスコ憲章前文に、「戦争は人の心から起こる。ゆえに、平和の砦は人の心の上に築かねばならない」とある。戦争に対する子供のイメージが変化していると言われる今日、様々な資料の活用を図り、多角的に理解させるとともに、生徒の心に訴える授業の展開を目指したい。

イ、単元の関連図

第二次世界大戦はどのような経過をたどり、日本は太平洋戦争にどのような経過、目的で参戦していったか、また第二次世界大戦は人類にどのような惨禍をおよぼしたか、「戦時下の国民生活」に焦点をあてながら、12時間扱い（上限を想定し、補充、深化の時間と合わせた）で構成した。



指導計画

時	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 時	・戦時下の国民生活	1. 第二次世界大戦が日本および世界の国々にもたらした惨状を知る。 2. 生徒に興味・関心を持たせるために身近な地域等を題材に取り上げ、この単元の学ぶ意義を理解する。	1. 本時は単元全体の導入と位置付け、生徒にインパクトを与える教材・資料等の用意の工夫に努める。 2. 単に戦争の悲惨に気づかせるだけでなく、その原因や背景などについて考えさせる指導の工夫を図る。
2 時	・単元のあらまし	1. 適切な課題を設定した班学習を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・わが国の明治以降の歴史 ・なぜ、ファシズムが台頭したのか。 ・日本の軍部の台頭 (班学習1) 	1. 適切な課題を設けたプリントを班ごとに用意し、調べ活動を通して基礎の理解を促す。 2. 単元の外観の理解とともに導入時で感じた戦争に対する思いや疑問を訴える指導に留意する。
3 時	歴史年表作成1	1. 各班ごとに第2時の課題学習を通して得た成果をもとに年表を作成する。 2. 班学習を通して単元における基礎的事項の確認を行う。 (班学習2)	1. 単元内で取り上げている歴史的事項を生徒が作成したカードを使用し、それを時代順に並べることを通して単元の概観をつかませる。 (備考1参照)
4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 時	<ul style="list-style-type: none"> ・世界恐慌 ・ナチスの台頭とファシズム ・日本の不景気と軍部の台頭 ・日本の大陸進出 ・国際連盟の脱退 ・日中戦争と戦争の長期化 ・第二次世界大戦 ・日本の参戦 ・軍国主義の敗北 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界恐慌と各国の対策を理解する。 ・ファシズムや日本の軍部の台頭を理解する。 ・旧満州の位置等日本の大陸進出を地図を利用して具体的に理解する。 ・国際連盟の脱退やアジアを含めた我が国と世界の間係を理解する。 ・大戦の経過と戦争の終結を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 1. 世界恐慌から第二次世界大戦の終結までの歴史の流れを視聴覚教材等を利用して理解させる。 2. 第2・3時の班学習の成果を利用した指導の工夫に努める。 3. 導入時で感じた感想や疑問を説き明かそうとする意欲を引き出す指導に留意する。

8 時	① 歴史年表作成 2 ② 学習課題の発見	1. 前時までの学習を土台に、取材したレポートを発表し、班学習 1 と班学習 2（歴史年表作成 1）で調べた内容に関連づけ、あらたに解ったことや疑問点を加えた歴史年表 2 を作成する。 2. 話し合い活動や発表を通して生まれた単元に対する興味・関心を班内で発表し合い、班学習 4 の準備をする。 （班学習 3）	1. 個人学習の内容をカード化しておく。（備考 2 参照） 2. 導入時で感じた疑問や興味・関心を土台に取り組んだ班学習 2 の内容を、単元全体から俯瞰できるように指導・助言する。 3. 戦争が多くの惨禍をもたらせたことを認識させる指導の工夫をする。 4. 生徒自らが課題を設定できるよう指導・助言をする。
9 ・ 10 時	【戦時下の国民生活】 ① 学習課題の設定 ② 学習課題のまとめ	1. 班ごとに課題を設け、学習の段取りを決める。 2. 各班ごとに作業を進める。 3. まとめ（発表）の作業を行う。（班学習 4）	1. 前時までの学習成果を土台に深化した課題の設定ができる助言の工夫に努める。 2. 適切な資料の用意や助言を与える。
11 時	発表会	1. 各班ごとに発表をおこなう。 2. 学習した感想を書く。	1. 終了後、各班の発表内容等を相互的・自己的な評価アンケートを実施する。 （宿題）
12 時	単元のまとめ	・各自の感想を発表する。	1. 発表を通して単元のまとめをする。 2. 戦争が多くの惨禍を与えたことを理解させ、平和の尊さを認識させる。
事前 学習	【授業以外の個人学習】 ・第二次世界大戦に関する資料の収集（身近な地域の人々への取材）	・身近な地域の人々を通して、取材、レポートを事前に提出する。	1. 取材内容等についてプライバシーなどに十分に注意する。 2. 提出されたレポートをさらに補充させる指導をする。

備考 1 カード 1 ……歴史的事項

備考 2 カード 2 ……取材した内容の抜粋（授業以外の個人学習時に作成）

学習指導案（第1時）

ア、主題「戦時下の国民生活」

イ、本時の目標

- (ア) 身近な地域を題材に取り上げることを通して、単元に対する興味、関心を持たせる。
- (イ) 戦争の悲惨さに気づかせるだけでなく、戦争に対して多角的に考察、判断できるきっかけをつくる。

ウ、展開

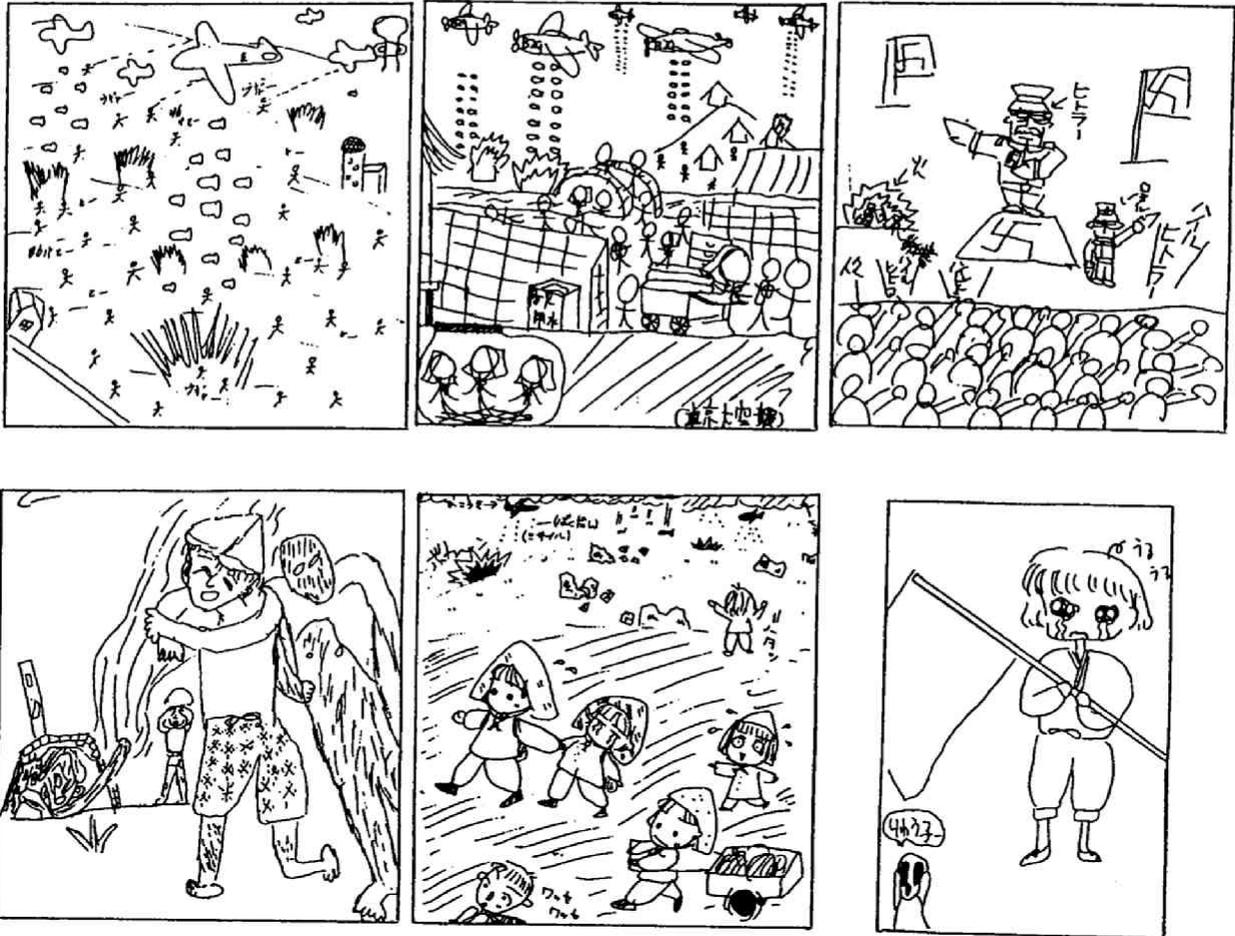
時	学習活動、学習内容	指導上の留意点	評価の観点	資料
導入 15分	①生徒が描いた戦争に対するイメージ画をみて、学習課題に気づく。 (班・一斉)	<ul style="list-style-type: none"> ・事前指導を十分に行う。 ・できるだけ多くの生徒の作品を見せるように配慮する。 ・課題を見つける目を持つことを意識させる。 	㊦小学校で学習したことや本やテレビ、聞き取り調査を通して知ったことを描いている。	・TPシート
展開 30分	身近な地域には、どのような戦争体験があったのだろうか			
	②身近な人に尋ねた戦争に対する取材内容を生徒代表が発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・祖父の戦争中の暮らし ・祖母の戦争体験談 ・日中戦争祖父に聞く (個・班)	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全体が、生徒の発表を聞くだけでなく、疑問に思ったことを質問出来るようにメモを取らせる ・戦争中の実物を単に提示するだけでなく、視覚、聴覚、感覚等を通しクラス全体が追体験できるように配慮する。 	㊦みんなに解るように発表に工夫をこらす。 ㊦㊦和泉中学区域にも戦争被害があり、様々な困難な生活をしてきたことを理解する。	・実物 焼夷弾 防空頭巾 衣料切符 ・OHP
	戦争をアジアの国民は、どのようにとらえていたのだろうか			
	③シンガポールの教科書の表紙を見て、戦争について様々な角度から考察する。 (一斉・個・班)	<ul style="list-style-type: none"> ・当時の情勢を多角的にとらえられるように配慮する。 ・提示資料を自分のものとして、追体験できるような学習環境をつくる。 ・世界平和の大切さを理解させるよう努める。 	㊦㊦戦争について過去のものとして、身近な出来事として、自らの生き方も合わせて思考してみる。班討議し各班と意見を交流する。	・アジアの教科書 ・OHP
まとめ 5分	班討議の結果さらに学びたいこと、疑問に思ったことなどを記録しお互いに学びあう			
	・授業の流れとポイントの確認 (班・一斉)	<ul style="list-style-type: none"> ・各班が戦争について、どのようなことを学習したいか、相互に確認しあえるように配慮する。 	㊦㊦カードを活用して今後戦争について何を学習したいか考える。	・6枚のカード (TPシート)

指導と評価の一体化を図るために、学習形態（個別）（班）（一斉）と明記し、評価については評価の観点を㊦（関心、意欲、態度）㊦（思考力、判断力）㊦（技能、表現）㊦（知識、理解）と表記した。

エ、評価

- (ア) 色々な見方、考え方に触れ、学習意欲の高揚を図れたか。
- (イ) 今後の学習の中で、戦争に対する多角的な見方を培うきっかけをつかむことができたか。

【事前調査1】生徒が学習する以前に描いた戦争に対するイメージ画（中学1年生7月調査）



【事前調査2】戦争からどんな印象を受けますか

- 怖い、戦闘機が飛んでいる
- たくさんの家が燃えたり、大勢の人が死んでしまう
- 体に人の血がかかる、黒い雨がふる
- 国と国との威力、国の強さをみせるためのもの
- ピカドン、千羽鶴
- 原爆、東京大空襲、ポツダム宣言
- 広島、長崎の原爆、食料難、PKO
- 一人ぼっちになりそう、焼け野原
- 悲しく無残な姿、多くの人の死、残された人の苦勞
- とても怖い、あってはならないこと

【事前調査3】戦時下の国民生活はどんな暮らしでしたか

- 食料がなくて、防空壕の中にいた
- いつでも逃げられるように、目立たない生活
- 家族がいなくなって一人になり、死んでいく
- ダイコンをかじって食べた、何でも食べた
- いつ爆弾がふってきてもよいように、防空頭巾をかぶっていた
- 「ぜいたくは敵」がスローガンとなっていた
- サイレンがいつなるか、いつなるか、ドキドキしている
- 不安、食物がない、疎開する
- 配給で食料をもらっていた
- いつも空襲におびえながら、とてもこわかった

(5) 研究授業（第8時）

ア 主題 研究課題発見へ向けての班活動 [班学習3]

イ 本時の目標

班学習やその補充学習で培った基礎的理解と、個人学習で調べた内容をもとに、班の研究課題決定へ向け、話し合い活動を行う。

ウ 本時の展開

時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 (5分)	学習内容の確認	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習の流れを確認する。 本時の学習目標と方法の説明を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> あらかじめ座席を班ごとにし、年表を用意しておく。
展開 1 (15分)	取材内容の発表 (歴史年表作成2)	<ul style="list-style-type: none"> 班ごとに、個人学習で調べた内容を発表し合う。 →あらかじめ個人の学習内容をカード化しておき、年表の別欄に組み込む。 	
展開 2 (15分)	班での話し合い	<ul style="list-style-type: none"> 展開1で完成した年表を見ながら、新たな発見、関心、疑問を班内で発表し合う。 発言は、記録しておく。(→資料参照) 	<ul style="list-style-type: none"> 机間巡視により助言等を行う。
展開 3 (10分)	班での話し合いの内容の発表	<ul style="list-style-type: none"> 展開2の話し合いの内容を班の代表者が報告する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表内容について、助言、指導を行う。
まとめ (5分)	評価と次時の予告	<ul style="list-style-type: none"> 本時の取り組みについて口頭による評価を行う。 次時は、展開2で生まれた発見、関心、疑問をもとに班ごとに研究課題を決定し、研究活動を行うことを告げる。 	<ul style="list-style-type: none"> 評価は、話し合い活動における意欲などについて行う。

エ 本時の評価

班学習やその補充学習で培った基礎的理解と、個人学習で調べた内容をもとに、班としての研究課題決定へ向け、活発な話し合い活動が行われたか。

関心・意欲・態度……………班活動に対する積極性。(発言等)

技能・表現……………カード化された個人の発表内容について評価する。

思考・判断……………班での話し合いの記録にもとづいて評価する。

う予測があった。したがって、課題を指示する際にも、できるだけ体験談を聞く努力を生徒に求めた。

提出されたレポートを点検した結果、学級40人のうち25人の生徒が、なんらかの形で戦争体験者の声を聞くことができた。

研究授業における生徒活動の観察、また終了時の記録用紙の点検によって、一つの傾向が現れている。それは、Aの体験談を直接聞くことができた生徒は、その後の授業に対しても、大変意欲的であったということである。このことは、生徒が、体験者（多くは肉親）の話を聞くことにより、歴史を身近なものとして、また自分自身に強く関わるものとしてとらえた結果と思われる。

歴史的分野の学習において、この単元は取材、資料収集などにより、直接歴史を感じ取ることが可能な数少ない教材である。研究のねらいを達成する上で、今回の指導方法の工夫は大変有効な手段であると思われる。

イ 第8時研究授業（班学習3）について

前もって作成した年表（歴史年表作成1）に、カード2（個人学習で取材した内容の抜粋）を組み合わせることによって生じる新たな興味、関心、疑問を発表し合う活動であり、同時に、次の段階である班の研究課題を決定するための基礎となる活動であった。

Aでのべたように、取材内容によって若干の差はあったが、すべての生徒が自分のレポートより抜粋した内容を班内で積極的に発表し、意見交換を行うことができていた。特に、通常の授業では知ることのできない重要な体験に接して驚き、そこから多くの疑問や関心が生まれた。

ある班では、兵士として戦争を経験した人が「死を恐れていなかった」ことに関心を持ち、「なぜ、当時の人々は死ぬことを恐れなかったのか、どのような考え方をしていたからなのだろうか」という疑問が発表された。また、別の班では、「学童疎開についてもっと詳しく調べてみたい」「あんな大きな痛手から日本はどうやって立ち直ってきたのか」などの意見が発表された。授業後、記録用紙を点検したところ、合計71の疑問や関心が記入されていた。

授業全体を通して、生徒個々の積極的な話し合い活動が随所に見られ、おおむね本時の目標は達成されたと思われる。

ウ 評価について

本時の授業は、班学習やその補充学習で培った基礎的理解と、個人学習で調べた内容をもとに、班としての研究課題決定へ向け、活発な話し合い活動が行われたかどうかの評価のポイントとなっている。

結果として、授業外の個人学習の充実が、関心、意欲、態度に大きくかかわることが判明した。また、カード2に記載された個人の発表内容を歴史年表に貼りながら行う班の活動は、発表の技能を高め、表現する力を培う上で非常に効果的であり、同時に班員相互の意見交換により思考力、判断力が高められることがわかった。

4 研究のまとめと今後の課題

歴史的分科会では、「主体的な学習を通し歴史的事象を多角的に考察、判断し、自らの生き方に生かす力を育てる指導方法の工夫」を主題として研究を進めた結果、次の点を明らかにすることができ、また今後の課題が明確になった。

(1) 研究のまとめ

ア 主体的な学習活動の一方法として、取材、資料収集、発表、話し合いをもちいて自ら活動する授業の展開をめざす場合、個人の取材、資料収集の充実が大切であり、身近で、具体的な取材対象があれば、多くの単元で用いることが可能な手法である。また、発表、話し合いを通して生徒一人一人のかかわりは主体的なものとなり多角的に考察し、判断することによって、思考力、判断力、表現力の向上に効果的であった。

イ 自ら取材し、生徒中心の学習活動によって歴史上の史実を追体験し、発見する学習によって、一斉授業より効果的な興味、関心を引き出すことができた。また、ひとつの発見からより深い理解を追求しようとする意欲が生まれ、学習意欲の喚起には効果的である。平和の尊さや、命の尊厳にかかわる第二次世界大戦の単元を取り上げたことで自分の生き方だけでなく、指導者の予想以上に、祖父母や父母が生きてきた現実と、現代社会を認識して、次の世代にあるべき理想的な社会を日本と世界の関わりの中で考えさせることができた。

ウ 学習内容を再構成して、適切な課題を設定した学習を取り入れたことにより、取材、資料収集、発表、話し合い等の活動は、生徒の興味、関心、意欲を引き出すうえで効果があった。指導計画の第1時における単元の導入授業は、その後の授業で生徒の興味、関心、意欲を引き出すうえで最も重要なポイントとなるため、生徒に強い印象を与える教材、資料等の用意に努めるとともに、単に戦争の悲惨さに気付かせるだけでなく、その原因や理由等についての疑問を抱かせる指導の工夫を図ることが大切である。評価については、自己評価カード等を活用することによって、生徒一人一人が、自分自身を振り返ることができた。

(2) 今後の課題

本研究を通して、取材、資料収集、発表、話し合いをもちいて授業を展開することが主体的な学習活動を展開するうえで有効な指導方法であり、身近な具体的な取材対象があれば、あらゆる単元で用いることが可能な手法であることがわかった。この取り組みをより効果的に活用するためには、直接の取材活動ができるような教材の開発を行い、指導計画に位置づけることが必要である。そのためには、学校間での情報交換を今まで以上に活発にすることが大切である。そして、その上で、調査項目やまとめ方、発表方法について計画的、段階的に指導を進め、適切な助言、援助を行うことが大切だと考える。

さらに、評価については、評価計画をたてるとともに、より生徒の学習意欲を高めるようなフィードバックについての工夫を図ることも今後の課題であり、継続して研究を続けたい。

公民的分野

生徒の主体的に学び続ける意欲・態度が育つ多様な学習活動を取り入れた授業の改善
—「雇用と労働条件」の学習を通し思考力・判断力を深め、表現力を高める学習活動—

1 主題設定の理由

現代社会は、科学技術の進歩と産業の進展によって、また情報化、国際化の押し寄せる中で、産業構造の急速な変化をもたらした。それに伴って日本の伝統的な雇用制も揺らぎ、国民の労働観や価値観も変わりつつある。我々の試みた意識調査（中学3年生を対象にした6校のサンプル）の結果からも、職業に対する意識傾向は安定性を志向しつつも能力賃金制を求める意見が6割を占めた。これは現代社会の労働観や価値観の変化に敏感な反応を示したものと考えられる。また週休2日制の広がりに伴う余暇の増加と経済情勢、さらに今後の雇用情勢等にも少なからず影響が出てくるものと考えられる。

こうしたとき、刻々と変化する社会的事象を学習対象とする社会科は、生涯にわたって学び続けていく能力の基礎を養うと同時に、「公民的資質の基礎を育成する」ことが求められている。しかし、現実の授業は、いわゆる知識詰め込みの一斉授業に陥りやすく、生徒は学習に対して受け身になりがちである。従って、公民的分野の目標「(4)社会的な事象を確実な資料に基づいて様々な角度から考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断する能力と態度を育てる」ことには、なかなか結びつきにくい。生徒の主体的な学習を促し、社会的事象に対する関心を高めるためには、生徒が自分たちの生活経験に基づき、社会的事象の中から自分自身にかかわる切実な問題を追求し、自己の社会生活との関わりを深めていく学習を意図した。

そこで学習内容としては、学習指導要領の公民的分野「(2)国民生活の向上と経済」の「イ。国民生活と福祉」の「雇用の労働条件」を取り上げた。この項目を取り上げた理由は義務教育の最終学年にあたり、3年間の進路（生き方）指導の積み上げの成果を生かせること、また授業で学んだことが単に一過性の学習に陥ることなく、むしろどの生徒にとっても生涯の課題となって自らが解決していかなければならず、それを考える契機になり得るととらえたからである。さらに学校も社会も休日が増える中であって、目的をもった余暇の過ごし方を考える機会にもなると考えたからである。

本研究では、さまざまな学習活動の中から討議法の一つであるディベートを中心にして、しかもディベートを直接に担当しない者にも紙上のディベートを課すことで、生徒の思考力・判断力・表現力が高まり、学習活動に対する成就感や満足感が得られ、その結果として、主体的に学び続けるという意欲・態度が育つと考え、上記の主題を設定した。

2 研究のねらいと研究の方法

(1) 研究のねらい

- ア 身近な社会的事象（雇用と労働条件）を題材とし、生徒が興味・関心を高めるような資料などの教材の提示方法や構成を工夫する。
- イ ディベートを通して生徒の主体的な資料収集や選択、発表など一人一人の生徒が主体的に学習にかかわり、自ら考え意欲的に学習する態度を育成する。
- ウ 現代の社会生活の変化の中での雇用と労働条件の実態と変化について理解を図り、今後の職業生活に生かそうとする態度を育成する。

(2) 研究の方法

生徒は自ら課題を持って考えたり、行動するなど、目標を明確にして学習に取り組んでいるときには本当に生き生きと目を輝かせる。自分の意志で学習を進めることができるとき、生徒は多少の困難があっても、それを乗り越えていく。その中で学習に対する充実感・成就感を体得し、さらに学ぶ意欲を高めていく。生徒が主体的に取り組む学習活動を重点に、下記の仮説を設定して研究を進めた。

— 研究の仮説 —

- ・自ら考えたり、それを発表する能力や表現力を高める。
 - ・様々な課題を自分の意思で切り開いていけるだけの思考力・判断力を高める。
 - ・様々な課題解決の必要性を感じ、その見通しをもつ。
- これらのことから、生徒が主体的に学習し、生涯にわたって学び続ける意欲・態度が養われる。

上記の仮説を以下の手順で検証することにした。

- ア 生徒が現在感じている問題点を知るために、職業に関する生徒の意識調査を行い、実態を把握する。
- イ ロールプレイにより、雇用問題の疑似体験を通し、生徒の興味関心を高める。
- ウ 生徒が自ら資料収集や選択ができるように、労働問題に対する基礎的な知識を身に付けさせる。
- エ 調査活動や話し合いを通し、自分なりの考えを深める。
- オ ディベートにより、自分の考えを相手に分かりやすく伝える表現力や聞く力等を養う。

3 指導計画

(1) 単元名 「雇用と労働条件」

(2) 単元の目標

- ア 日本の労働条件の現状を知り、それらの諸問題点についての基礎的な理解を得させる。
- イ 日本独特の雇用形態である「終身雇用制度・年功序列賃金」を通して、個人や企業の在り方について考えさせるとともに、職業に対する意識を深めさせる。

「雇用と労働条件」指導計画

<p>第 1 時</p>	<p><u>〔雇用などの労働問題に対する課題意識を持たせる〕</u> 興味・関心</p> <p>導 入…事前テストを行い、生徒の知識・理解の様子を知る。 職業意識調査の結果を提示し、感想を求める。</p> <p>展 開…意識調査の結果をもとに、他の資料も提示し、現代の雇用の諸問題について話し合わせる。 「現代の雇用に関する問題点としてどの様なものがあるか。」</p> <p>まとめ…ロールプレイの課題を与える。 ディベートの論題を決定し、調査・資料活用などの方法を説明する。 ディベーターを決定し、ディベート参考資料を配布する。</p>
<p>第 2 時</p>	<p><u>〔雇用・労働問題の現状を知る〕</u> 興味・関心、知識・理解</p> <p>導 入…雇用問題のロールプレイ（企業のリストラ、女子大生の就職難など）により、課題意識を深める。</p> <p>展 開…現代の雇用や労働条件の様々な問題について説明する。 （ワークシートにより、基礎知識を身に付けさせる）</p> <p>まとめ…次時のディベート準備を指示する。 ディベーターとは別に、各自の意見を確認し、紙上ディベートの説明をする。</p>
<p>第 3 時</p>	<p><u>〔課題の追求〕</u> 資料活用、思考・判断</p> <p>ディベート準備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ディベートの資料・マニュアルをもとに、準備を行う。 ・ディベートを行わない者は、紙上ディベートを行い、ディベートの流れを予想させる。
<p>第 4 時</p>	<p><u>〔課題の深化・補充〕</u> 資料活用、思考・判断、表現</p> <p>ディベート 論題「終身雇用制（年功序列賃金）はなくすべきである」</p> <p>導 入…論題を提示し、役割分担の確認をする。</p> <p>展 開…ディベートの実施。 （ディベートは短時間でいき、判定者からの意見・質問などを多く出させディスカッションに近づけるよう工夫する）</p> <p>まとめ…ディベート後の自己評価。 教師の講評、レポートの課題を提示する。</p>

部分は、各時における評価のおもな観点を示している。

4 展開例

第1時 雇用と労働の現状 その1

(1) 本時の目標

- ① さまざまな労働観があることに気付く。
- ② 雇用と労働条件の課題（男女雇用の機会均等、男女の賃金格差、日本型労働形態）をつかむ。
- ③ ロールプレイ、ディベートに意欲的に取り組めるように意識を高める。

(2) 本時の展開

	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	雇用と労働条件 現代の中学3年生の 職業に関する意識 (さまざまな労働観)	1. プレテストを受ける(10分) 2. 『職業に関する意識調査』(事前に行った意識調査のまとめ)のプリントを見る。 3. 意識調査のまとめについて、教師からの説明を聞き、現代の中学3年生の職業に関する意識の大枠をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が目を通せるように、時間を保証する。 ・自分とは異なる考え方の人がどれだけいるかを捕らえさせる。
展 開	男女雇用の機会均等 男女の賃金格差 日本型労働形態	4. 「女性はいつまで働くか？」について、データ(Q11)を確認する。 自分自身はどう思うか、また、なぜそう思うのかを考え、ワークシートに記入。 5. 『同年齢の男性と女性の賃金格差』の資料を見て、現実の女性の社会で雇用状況を確認する。 6. 『意識調査』のQ6、Q8のデータから「会社への執着度」と「給料制度」に対する意識のズレについて考える。 自分自身はどう思うか、また、なぜそう思うのかを考え、ワークシートに記入。 記入した考えをもとに、自主的に、または指名を受けて何人か考えを表明する。 7. 日本型の労働形態(終身雇用制、年功序列賃金等)について、説明を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ここでは、各自記入させるだけ。 ・女性の賃金の低さは、結婚・出産による退職と、その後の職場復帰時における労働形態の変化によるものが大きいことを押さえる。 ・『意識調査』では、「いやなことがあってもできるだけ今の会社で頑張る」と終身雇用制を望む生徒が多い反面、能力制賃金制度を望む生徒も多い。現在の日本型労働形態ではこれは矛盾してしまうことを指摘しつつ、現状を知らせていく。
ま と め	ディベートの説明 ディベーターの決定 ロールプレイヤーの決定	8. 今回のディベートのテーマ・やり方・調査方法の説明を受ける。 9. ディベーターを決定する。 10. 次時に行うロールプレイを演じる人を決定する。(ロールプレイヤーには授業後、台本を渡し、配役の割振りをする。)	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を配布し、今後の授業の進め方もあわせて説明する。 ・ディベーターは希望者を募るが、出ない場合は次時まで決定しておく。 ・ロールプレイヤーはディベーター以外から希望者を募るが、出ない場合は次時まで決定しておく。

(3) 本時の評価

- ① 労働観は一様ではなく、さまざまな労働観があることに気付いたか。
- ② 雇用と労働条件の課題をつかめたか。
- ③ 積極的に次時の課題に取り組もうとしたか。

第2時 雇用と労働の現状 その2

(1) 本時の目標

- ① ロールプレイを通じて、雇用と労働に関する問題点を見つめ直し、現状を理解する。
- ② 日本の雇用と労働条件について、自分なりの考えを持つ。

(2) 本時の展開

	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	雇用と労働に関する問題に対する関心	1. ロールプレイ1（女子大生の就職難）を見て（演じて）、ワークシート①に感想を書く。 2. ロールプレイ2（能力主義の弊害）を見て（演じて）、ワークシート①に感想を書く。 3. ロールプレイ3（50才の出自）を見て（演じて）、ワークシート①に感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート①を配布してから、ロールプレイに入る。ロールプレイではあまりかたくなりすぎないように、気を配る。 ・ロールプレイ1～3は、いずれも生徒にとって実体験のない場面設定ではあるが、将来体験する可能性のある問題として捕らえさせ、興味・関心を持たせる。
展 開	<p>男女雇用の機会均等と雇用形態</p> <p>雇用のシステム（昇進・昇級に関する能力主義と年功主義）と労働時間</p> <p>企業のリストラと失業問題</p>	<p>4. ワークシート②に記載されている、3つのロールプレイの台本を見て、それぞれの中で、「ここはおかしい、ここは納得できない、ここはもっとなんとかならないか」というような点をピックアップする。</p> <p>5. ロールプレイ1について、数名が感想やピックアップした点を発表する。 男女雇用の機会均等が実現しているか考え、各自の意見を出しあう。 男女雇用の機会均等の現状、雇用形態などについての教師の説明を聞く。</p> <p>6. ロールプレイ2について、5と同じ活動をする。 能力主義による昇進、昇級をどう考えるか、各自の意見を出し合う。 日本国内の昇進制度、給与システム、働きすぎ（過労死）などの現状について、教師の説明を聞く。</p> <p>7. ロールプレイ3について、5と同じ活動をする。 企業のリストラについてどう考えるか、各自の意見を出し合う。 定年制、失業時の雇用保険、ハローワーク（公共職業安定所）、不当労働行為などについて、教師の説明を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート②は、すべてのロールプレイが終わってから、配布する。 ・男女雇用機会均等法は罰則規定がないために強制力が伴わないことや、今年の就職状況に触れる。雇用形態については、正社員と臨時雇いに大別する程度にとどめて、自営業者の存在にも触れる。 ・昇進、昇級について、伝統的な年功による制度と近年増加しつつある能力による制度の違いを把握させる。働き過ぎによる過労死も説明し、その中で他国との労働時間の違いに触れる。 ・失業したらどうなるのか、どういうときにリストラが行われるのかを、考えさせながら説明していく。
ま と め	雇用と労働に関する日本の現状	<p>8. 日本の雇用の抱える問題点の中で、今日の授業であつかったことを整理する。</p> <p>9. 次時の授業内容の予告。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の授業で出た様々な意見の違いを確認し、今後のディベートへ発展させるよう導く。 ・第1時に配布した資料と各自用意できる資料を持ってくるように指示する。

(3) 本時の評価

- ① 雇用と労働に関する問題点と、日本の現状について理解できたか。
- ② 望ましい雇用と労働条件について各自が自分なりの考えを持てたか。

第3時 ディベートの準備「終身雇用制（年功序列賃金）はなくすべきである」

(1) 本時の目標

- ① 資料収集したものを持ち寄り、ディベートの準備や作戦を立てる。
- ② ディベーター以外の生徒は、紙上ディベートにより次時の予想と意欲的に取り組むための準備を行う。

(2) 本時の展開

	学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	資料の収集 紙上ディ ベートの準備	<ul style="list-style-type: none"> • それぞれに持ち寄った資料から立論に必要なものを選び出す。 • 収集した資料から必要な箇所を情報カードに書き出す。 • ディベーター以外の生徒は並行して紙上ディベートの準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> • 情報カード • 紙上ディベート用ワークシート
展 開	作戦をたてる 立論、反駁 最終弁論 それぞれの 準備をする	《ディベートを行う班》 • ディベートの作戦を立てる。 A立論を作成する。(立論カード) グループのメンバーが立論で使う内容を箇条書きでまとめる。情報カードを利用して立論の内容を考える。(15分) ここで立論カードの交換を行う。 B反駁を検討する。 相手の立場を予想し、これに対する反駁の資料を用意し、また相手の反駁も予想して、その反論を用意する。特に、相手の立論カードを利用して作戦を立てる。 C発表の準備をする。 説明するために掲示する資料や、印刷する資料などを作成し、準備する。 • 時間の確認をする。 立論、反駁、最終弁論などの時間配分を確認する。 • 発表内容を分担し、ディベートに備える。 《ディベートを行わない班》 • ディベートを行わない生徒には、紙上ディベートを行わせる。(個人単位) 自分で集めた資料や、配布された資料にもとづき自分の立場を明確にしてワークシートにそってディベートを行う。 立論、反駁、最終弁論に使った資料は最後にはきちんと書き込む。 あくまでも自分の意見を記入し、次時のディベートできちんと討論に参加できるような準備と、質問事項も考えワークシートに記入する。	<ul style="list-style-type: none"> • 作戦カード • 各班の中でABCは分担して同時進行で行う。 • 各班の進行状況に合わせてアドバイスする。 • 模造紙、TPシート、ファックス原紙など必要に応じて用意する。 • 時間配分についても細かく指導する。 • ディベーターの班でディベートに参加しない生徒がいないよう指導する。 • ディベーターの班とは別に紙上ディベートを行うためお互いに集中力が欠けないように注意する。 • 自分の考えや疑問点をワークシートに記入する。
ま と め	リハーサル を行う。	<ul style="list-style-type: none"> • 本番と同じように時間を計ってディベートのリハーサルを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> • 本番のディベートを想定して練習する。 • ワークシートを集める。

(3) 本時の評価

- ① 資料を収集し、ディベートの準備を行ったか。
- ② ディベートに向けて効果的に資料を活用する工夫をしたか。
- ③ ディベーター以外の生徒が紙上ディベートにより次時に向けての準備が意欲的に行えたか。

第4時 ディベート「終身雇用制（年功序列賃金）はなくすべきである」

(1) 本時の目標

- ① 我が国の伝統的な雇用形態である終身雇用制（年功序列賃金）を通して、企業からの見方、労働者からの見方を考える。
- ② 討論の中で資料を活用した発表ができる。
- ③ 討論に積極的に参加する態度を身につける。

(2) 本時の展開

	学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	論題の確認 自分の考え (3分)	「終身雇用制（年功序列賃金）はなくすべきである」という論題の確認をする。 判定者の立場を確認する。(挙手)	•それぞれの立場を確認しディベートの準備をする。
展 開	ディベート	<ol style="list-style-type: none"> 1. 立論それぞれ (4分) 2. 作戦タイム (2分) 判定者は判定表に記入する。 3. 各側からの反対尋問 (2分) 〔第一反駁〕 4. 自由討論 (5分) 5. 作戦タイム (2分) 判定者は判定表に記入する。 6. 最終弁論それぞれ (3分) 〔第二反駁〕 7. ディベーターと判定者による自由討論。 それぞれの立場の補足、判定者からの質問等 (5分) 8. 判定カード記入 (3分) ディベーターは自己評価カードに記入する。 <p>《予想される賛成側の主張》</p> <ul style="list-style-type: none"> •年功制では転職が難しく、適した職業ではない場合に我慢を強いられる。 •社会の活性化のためには能力制がよい。 •個人の特性を生かすにくい。 •中途退職、中途採用者が増加している。 •終身雇用制は、労働者にとって出口のない圧力釜のようなもの。 •国際化の中で、現行のままでは世界の国々から取り残されてしまう。 •年功序列制ではあるが、現実には能力制の部分が多い。 <p>《予想される反対側の主張》</p> <ul style="list-style-type: none"> •経済的に安定する。 •能力制では、失業者の増加や落ちこぼれる人が多くなる。 •会社内の人間関係がスムーズになる。 •年金支給までの期間の生活保障が必要である。 •その会社の仕事についての知識が深まる。 •人間には能力差があり、それを平等に近づけられる。 •日本独自の経営システムであり、日本人の考え方にあっている。 <p>9. 判定 (2分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> •司会は教師が行う。 •計時を厳密に行う。 •ワークシート •ディベート判定表 •自己評価カード •作戦タイムの時間、判定者には判定カードに記入させる。 •できるだけ多くの生徒の発言を促す。
ま と め	終身雇用制 の問題点 (10分)	終身雇用制が果たしてきた役割と課題について考えたことをまとめワークシートにも記入する。 労働問題について自分の意見をレポートにまとめ後日提出する。	<ul style="list-style-type: none"> •ワークシート •レポートの宿題。

(3) 本時の評価

- ① 日本の終身雇用制の実態や課題を考えることができたか。
- ② ディベートに積極的に参加し、資料を活用した討論ができたか。
- ③ 相手の立場を理解し、自分の考えや意見を持つことができたか。

5 授業の考察

研究授業では、第4時のディベートによる授業を行ったが、指導計画全体についての考察を以下に述べる。

4時間構成の授業展開は、生徒の意識調査の結果の提示や雇用問題のロールプレイを行い生徒の課題意識、興味・関心を高め、ディベートによって学習内容を深めていくことをねらいとしたものである。特にロールプレイは、教師の作成した台本により生徒が寸劇を演じたものであるが、日頃ニュースなどで聞いていることでも実際に演じたものを見ることにより生徒が受けたインパクトは高かった。女子大生の面接場面に対する感想では男子生徒と女子生徒との意見が分かれたり、リストラの場面では、社会へ出て働くことの厳しさを知るなど現代の雇用に関する問題点を実感できた。以上の学習をもとに、「終身雇用制（年功序列賃金）はなくすべきである」を論題としてディベートを行い、日本の雇用と労働条件についての学習を発展させていった。

ディベートに先立つ準備の時間には、ディベーターは立論や反駁の作戦を立て、ディベーター以外の生徒は紙上ディベートとして資料を用いて個人の立論や反駁、質問などを考えた。これは、論題に対する知識・理解や独自の意見を持ち、ディベートの時に判定者が議論に加わりやすいようにと考えて行ったものである。ディベート準備は1時間では不足、グループで協力して、放課後まで残って資料を調べたり、提示資料作成などの事前学習に取り組んでいた。今回のディベートでは、生徒同士の活発な意見交換ができるように、自由討論の時間を多く取り入れた。この試みは成功し、判定者からの質問・意見も含めて議論がたたかわされ、予定の時間を少し延長しなければならないほどであった。ディベーターのほとんどの生徒から「もっと時間が欲しい」「討論が盛り上がったところで時間になってしまっていて残念だ」という声が上がった。賛成側、反対側の両者とも多くの者を納得させるだけの意見を出し、生徒の思考力・判断力は確実に高まったといえよう。ディベーターとして活動した生徒の感想として、「はじめの意見から、いろいろ自分で調べた結果、意見が変わった。こういうものは自分から分かろうとして調べなければいけないと思った。」というものがあつた。判定者の生徒の感想としても「私は賛成側であったが、反対側の意見を聞いていると納得できる点も多くあつた。」「両方ともうなずける意見だった。自分と違う意見の人の言ったことも筋道が通っていて、その意見の方がいいかなと思った。いろいろ違う意見が聞けて面白かつた。」などがあつた。ディベート後のレポートから判断してもかなりの生徒がディベート前後で意見の変容がみられ、生徒が自分と違う意見を知り、新たな考え方が生まれ論題に対する学習が深まったと考察できる。最後に、「今まで考えてもみなかつた問題だけれども、調べてみると非常に興味をもちた。数年先には自分も働くことになるがそれまでに今度の問題について考えていきたい」という生徒の声があつた。このことから今回のディベートが生徒の主体的に学び続ける意欲・態度を育てるために、有効であつたといえよう。

<「企業のリストラ」に関するロールプレイの台本>

場面3 社長室 登場人物…社長A氏・課長B氏

A：今日、君に来てもらったのは他でもないが、うちの会社はとても苦しい経営状態にある。わかるね。

B：はー。

A：役員の賃金を大幅にカットしたり、できるだけ経費を削減したが、まだだめだ。ついては、会社の組織を縮小することになり、君は課は廃止になった。そこで、君には北海道の子会社に、来月から移ってもらうことにしたよ。

B：えっ、来月ですか。

A：ウム。

B：お言葉を返すようですが、私ももう50才です。家には受験を控えた息子もおります。できれば東京においていただきたいのですが…。

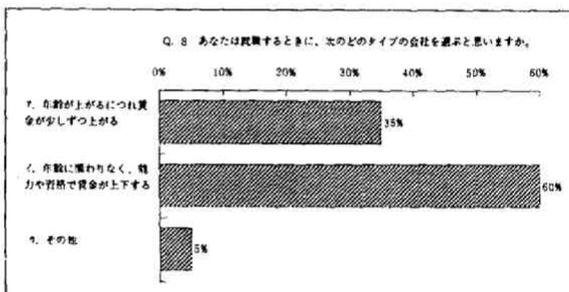
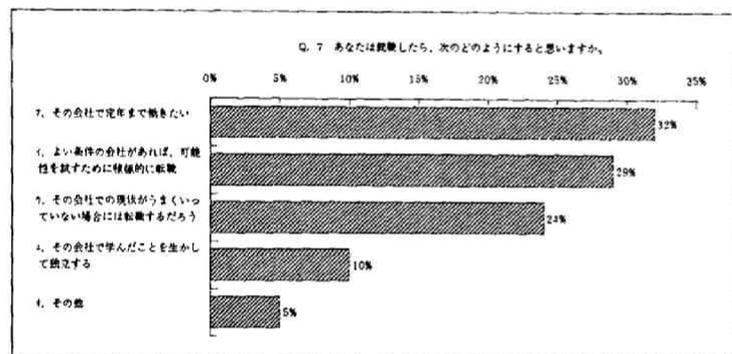
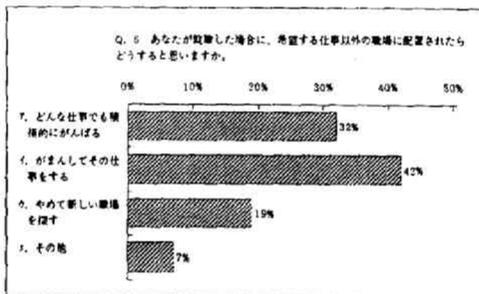
A：そう言われても、もう役員会で決まったことだから。いやなら、*割増つきの退職でもいいんだよ。

B：そんなー。今日まで一生懸命会社のために尽くしてきたのに、あんまりじゃないですか。

A：私もつらいんだよ。まー、よく考えて決めてくれ。

*割増つきの退職…定年よりも早く会社の意向で退職した場合、普通の退職金より割増金がつく制度。

<職業に関する意識調査結果（一部）>



6 研究のまとめと今後の課題

公民分科会では「生徒の主体的に学び続ける意欲・態度が育つ多様な学習活動を取り入れた授業の改善」を主題として研究を進め、次の点を明らかにすることができた。また、今後の課題も明らかになった。

(1) 研究のまとめ

ア、ディベートによる学習は、生徒の思考力・判断力を深め、表現力を高めるためには効果的であった。生徒が、主体的に資料収集を行い、自分の意見を構築し、発言することにより主体的に学ぶ態度は育成された。また、討論を通して、自分の考えとは異なる意見を聞くことにより、新たな視点から論題に迫られたことも重要な点であった。特に、自由討論の時間を増やしたことにより、その場で相手の意見に対する質問、反論や答弁を考えるなど思考力・判断力や表現力は確実に高まったといえる。

イ、ディベートの論題である「終身雇用制度（年功序列賃金）はなくすべきである」に迫るために、職業に関する生徒の意識調査を行い中学3年生の考え方を紹介した。また、現在の雇用に関する問題点をロールプレイにより劇化することにより、実態を少しでも身近なものとしてとらえられるよう工夫した。その結果、生徒の興味・関心を高めることができ、ディベートへの参加意識も高まった。

ウ、ディベート準備の時間には、ディベーター以外の生徒には紙上ディベートを課し、論題に対して自分なりの立論・反駁を考えさせることによりディベートに対する参加意識を高めることができた。

エ、ディベート終了後レポートを課したが、ディベートにおける他の者の意見などを参考にして、自分の考えを深めさせることができた。

オ、事前と事後に小テストを行ったが、学習内容の知識・理解の項目において、ほとんどの生徒の正答率が高まった。

カ、労働問題を生徒にとって身近な問題としてとらえさせることには、難しい面もみられたものの、学び続ける意欲・態度を育成するための内容としては適当であった。

(2) 今後の課題

ディベートをより効果的な学習とするためには次のような課題が残った。

- ・小単元の指導計画でなく、大単元での指導計画の中で数回のディベートを実施し、全員にディベートを経験させることにより、学習意欲を高める。
- ・1年生から資料を用いての班学習や個人の課題学習を数多く行い、資料の活用を工夫し、発表の機会を多くとることで討論がうまくできる環境をつくる。
- ・紙上ディベートは、一定の効果が上がったが、ディベーター以外の生徒の討論への参加という点で一層の工夫が必要である。